

まほろん令和7年度

第3回

館長講演会



日本歴史の扉を開いた遺跡(3)

東京都 弥生町遺跡

— 弥生時代 —

まほろん館長 石川日出志

令和7年9月21日(日) まほろん講堂 13:30~15:00

13:00 受付開始・開場

日本歴史の扉を開いた遺跡を語る 第3回

東京都 弥生町遺跡

まほろん館長 石川 日出志

【導入】 現在の東京大学の裏手にある弥生町向ヶ岡貝塚で、1884（明治17）年に1個の壺が見つかります。その9年後、別の遺跡で見つかった3個の壺がきっかけで、それが通常の貝塚から見つかる土器（現在の縄文土器）と異なる特徴があると気づいて、弥生式土器と命名されました。これが出発点となって、やがて縄文時代と古墳時代の間をつなぐ独自の時代の指標だとわかって弥生時代という時代名称が起こり、一般化します。

ところが、最初の発見者が1923年に学会回顧談を講演した際に、この壺を見つけた弥生町向ヶ岡貝塚の場所が分からないと明言したために、発見地点論争が始まります。

明治期後半に始まる弥生式土器研究の初期の様子や、地点論争の結末、そして近年の調査で、一帯が弥生時代後期の環濠集落であると判明したことなどを紹介します。

1. 弥生町向ヶ岡貝塚から1個の壺が見つかる

(1) 1884年3月2日、有坂鋳蔵らが弥生町向ヶ岡貝塚で1個の壺発見 【1】

これが「弥生式土器」名称発足のきっかけだが、最初の資料報告（坪井正五郎1889）では「石器時代」の土器とするだけで、弥生式という認識はなかった。【2-上】

(2) 「弥生式土器」の初出は1896年 【3】

蒔田まいだ鎗次郎が自邸（現駒込一丁目）で土器群を掘り出して報告した論文（蒔田1896）で「弥生式土器」と記す。東大人類学教室諸氏が考案した用語として引用。

(3) 「弥生式土器」名称は、1893年に北区西ヶ原農事試験場発見の3個の壺がきっかけ【4】

二人（八木斐三郎1898・大野雲外1902）の証言がある。長年その壺3個が所在不明だったが、2021年に確かな証拠がみつかり、「再発見」できた（石川2019）【4-下】

2. 「弥生式土器」研究の歩み

(1) 優れた蒔田鎗次郎の弥生式土器研究（1896～1906年）

①. 蒔田は、自邸で発見した土器群がきっかけで弥生式土器研究にはまり、文京区・豊島区・北区・新宿区・板橋区界隈の遺跡を探索（蒔田1896・1897）。【5】

特に「田端村道灌山」の遺跡（現在の田端西台通遺跡）＝豊島線（現山手線）建設工事の際に単独で調査・研究（蒔田1897・1898・1902b・1902c）。【6・7】

②. 弥生式土器は実用の土器で、石器時代と古墳時代の土器の中間的特徴をもつと指摘。

* 弥生式土器に2レベルを認識（蒔田1896・1897・1904）：

a). 石器時代と古墳時代の中間の土器【8-上】＝現在の弥生土器。

→ この認識がその後の弥生式土器研究の道をつくる！

b). 文京区界隈の各所で発見される同種の土器群＝現在の弥生町式土器（弥生後期）。

→ この点は1930年代になってようやく議論されるようになる。

③. 科学的態度を貫いた研究姿勢ながら、誰も継承しえなかった。

東大人類学教室の大野雲外(延太郎)が繰り返し批判(大野1902a・b:神祭り用の土器説)するも、調査事実(煤付着・底部擦れ・貝殻共伴)をもって実用品と反論。

*** 蒔田の研究が優れる点**

・蒔田1896: 自邸で3月発掘、5月論文刊行。短期間の研究の躍進は驚嘆すべき!
土器の出土位置と向きを記録。竪穴内での土器群の共伴を認識。土器を詳細計測(縄目の細かさも)。竪穴を住居と判断【8-上】。図を写真の技法で描く。

→ 竪穴内の土器の位置関係が復元できる【8-中】

・蒔田1902b・c: 貝殻との共伴、煮沸痕・底部の擦れから実用品と判断。

・蒔田1904: 縄文/弥生/古墳土器を形態分類して比較【8-下】

・蒔田1902a: 縄文土器に朱塗ありと判別。

(2) 各地で縄文土器よりも上層から発見される【9】

①. 1906年、八木奘三郎・N.G.Munroによる南加瀬貝塚(川崎市)の発掘(八木1906)。縄文土器を伴う厚い貝塚の上にある土層の中に、弥生土器を伴う貝層を確認。

②. 京都大学の濱田耕作が1917年に大阪府国府遺跡(現藤井寺市:濱田1918)、鹿児島県指宿遺跡(現橋牟礼川遺跡:濱田1921)でも、縄文土器の土層の上層から弥生式土器などを確認。

③. 1918年、長谷部言人らが大境洞窟(富山県氷見市)で落盤層を挟む上・下層(下層=縄文土器、上層=弥生式土器)で確認(長谷部1918)。

→ これらの事実から、次第に縄文土器と弥生式土器が時代の違いと認識されるように。

(3) 弥生式土器の担い手は?

①. 蒔田鎗次郎1896・1898: 石器時代土器→弥生式土器→古墳土器=中間の土器。石器と鉄器のどちらを伴うのかと問題提起。

→ 八木奘三郎1906・N.G.Munro1911=中間土器 intermediate pottery

②. 青銅器が伴う: 福岡県(鹿部遺跡)の甕棺から銅剣発見(八木1900)。

③. 石器が伴う: 愛知県(高蔵貝塚:鍵谷1908)で石器が伴うと判明。【10-右上】

④. 「金石併用時代」論(中山平次郎1917): 石器を伴う石器時代と金属器をもつ古墳時代が併行する時代と主張。しかし、金石併用時代とは、利器ではなく、装身具などに純銅が用いられる石器時代末を指すと批判される(濱田耕作1917)。

⑤. 大陸からの移住者説(鳥居龍蔵1917): 片刃石斧など弥生式土器に特徴的に伴う石器群が大陸に類例があることから大陸から移住して来た人々固有日本人と主張。【10】
京大の濱田耕作(濱田1930)や小林行雄(小林1938)に継承されて定説化した。

⑥. 稲作農耕民で縄文時代からの文化変容(山内清男1932-33): 人間集団の交替ではなく、縄文からの文化変容。弥生時代=1).大陸との交渉の顕在化。2).食料生産(稲作)の開始。3).縄文系・大陸系・弥生独自の3要素からなる。4).縄文式以後、日本列島に北・中・南の三つの文化変遷がある。

⑦. 1937年、奈良県唐古遺跡の発掘調査で稲作農耕社会であることが確定(末永ほか1943): 弥生土器を伴って炭化米・穂摘み具(石庖丁)・木製農耕具が出土。【11】

→ 現在は⑥を基本として⑤を組み合わせる意見が多い。縄文系と大陸系のいずれを重視するかは研究者間で差異がある。

3. 「向ヶ岡貝塚」はどこか？

(1) 有坂鋳蔵の懐古談(1923年)の不思議：「正確な位置は解りません」【2】

→ 有坂は造兵学の専門家(海軍省：造兵中将など)となったが、卒業後も東京大学と密に関わり、1902-25年は東京大学教授を兼務。思い出の地点を忘れる訳がない！

(2) 向ヶ岡貝塚はどこか？

①. 諸説が乱立して地点論争に(斎藤1963・太田1986)。【1】

②. 1975年東京大学発掘地点(東大1979)【12】： 弥生時代後期の溝・貝塚・土器検出。国史跡申請するも「向ヶ岡貝塚」名称は採用されず、「弥生二丁目遺跡」で指定。

しかし、この地点は向ヶ岡貝塚ではありえない！

→ 坪井報告(坪井1889)の挿図「向ヶ岡貝塚ヨリ上野公園ヲ望ム景」が決定的。

人物の後方の高まりは江戸時代の水戸藩邸北端の築山の名残で特定できる。坪井報文の冒頭に、挿図は石版刷で左右逆であることに留意せよというが、この絵を反転して東大調査地点からこの高まりを見るとその奥に見えるのは北の千駄木方面であり、上野公園は方向違い。

③. 地震学の開祖・田中館愛橘が1892年に坪井図地点の木造洋館(元お雇い外国人が居住)に転居(中村1943)。

→ 私は、有坂が地点をぼかした理由はこれだと考える。しかし有坂講演の時、愛橘はすでに(1921年)雑司が谷に転居していたが、

④. 坪井1889の一文「将に其跡を失わんとして居る」は、お雇い外国人用洋館が建設中であることを示唆する。

(3) 地点論争よ さようなら！ 【12・14】

①. 篠原和太による東大1975年調査地点の新解釈(鮫島1996)： B溝のみ弥生時代後期の溝で、弥生町の台地を巡る環濠をもつ集落遺跡。

②. 武田先端知ビル地点と農学部構内で方形周溝墓がみつき、環濠外は墓域であったと見てよい。【13】

③. 私は、「向ヶ岡貝塚の壺」の発見は田中館愛橘邸宅地点と考える。口頸部を欠くものの胴部が完存する壺の状態は方形周溝墓に伴った可能性が高いが、確証はない。むしろ、論争となった諸地点は、環濠の内か外かの違いはあるものの、いずれも一つの集落遺跡の中である。【14】

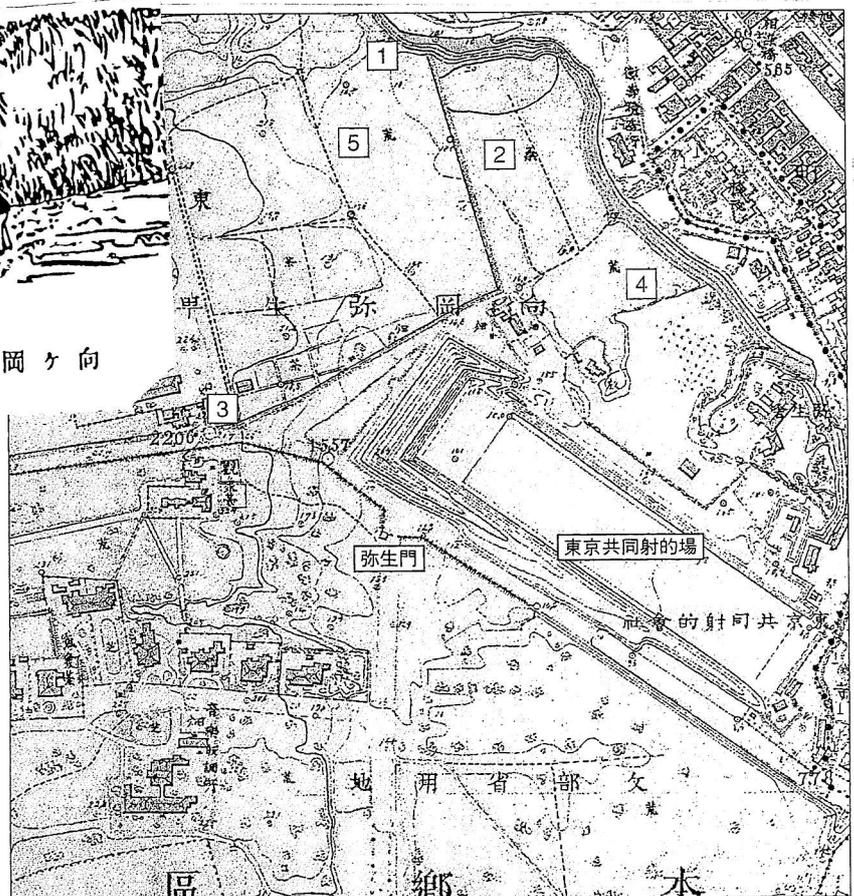
【参考文献】 (付図に出典が記してないのは石川2008による)

- ・有坂鋳蔵 1923 「日本考古学懐旧談」『人類学雑誌』38-5
- ・有坂鋳蔵 1925 『象の欠呻』実業之日本社(箱背文字=ありさか小象『象のあくび』)
- ・石川日出志 2008 『「弥生時代」の発見 弥生町遺跡』新泉社
- ・石川日出志 2019 「「弥生式土器」命名の契機となった土器について」『岩宿遺跡と日本の近代考古学』岩宿博物館
- ・上野 武 2001 『「最初の弥生土器」発見の真相』『古代学研究』153

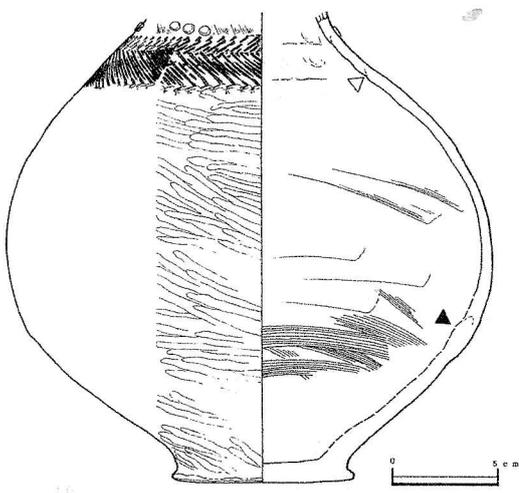
- ・太田博太郎 1986 「弥生町貝塚の位置」
- ・大野雲外 1902a 「埴瓮土器の種類に就て」『東京人類学会雑誌』190
- ・大野雲外 1902b 「埴瓮土器に就て」『東京人類学会雑誌』192
- ・鍵谷徳三郎 1908 「尾張高倉貝塚実査」『考古界』7-2・『東京人類学会雑誌』266（*二重投稿）
- ・小林行雄 1938 「弥生式文化」『日本文化史大系』1, 誠文堂新光社（小林 2005『小林行雄考古学選集』1, 真陽社に再録）
- ・斎藤 忠 1963 「弥生式土器の発見」『日本の発掘』東大新書 45, 東京大学出版会
- ・佐藤達夫 1975 「向ヶ岡貝塚はどこか」『歴史と人物』46
- ・鮫島（篠原）和大 1996 「弥生町の壺と環濠集落」『東京大学文学部考古学研究室紀要』14
- ・末永雅雄・小林行雄・藤岡謙二郎 1943 『大和唐古弥生式遺跡の研究』京都帝国大学文学部考古学研究報告 16
- ・田中館申一郎 1973 『雲神―田中館愛橋博士―』みちのく社
- ・坪井正五郎 1889 「帝国大学の隣地に貝塚の跟跡あり」『東洋学芸雑誌』91
- ・東京大学文学部考古学研究室（編：渡辺貞幸）1979 『向ヶ岡貝塚』東京大学文学部
- ・鳥居龍蔵 1917 「畿内の石器時代に就て」『人類学雑誌』32-9（鳥居 1918『有史以前の日本』磯部甲陽堂に再録）
- ・鳥居龍蔵 1925 『武蔵野及其有史以前』磯部甲陽堂
- ・中村清二 1943 『田中館愛橋先生』中央公論社
- ・中山平次郎 1917 「九州北部に於ける先史原史両時代中間期の遺物に就て」『考古学雑誌』7-10~8-3
- ・中山平次郎 1930 「近畿縄紋土器、関東弥生式土器、向ヶ岡貝塚の土器竝に諸磯式土器に就て（二）」『考古学雑誌』20-2
- ・長谷部言人 1918 「大境洞窟の遺跡に就いて」『河北新報』10.8-13（長谷部 1927『先史学研究』大岡山書房に再録）
- ・濱田耕作 1918 「河内国府石器時代遺跡発掘報告」『京都帝国大学文学部考古学研究報告』2
- ・濱田耕作 1921 「薩摩國指宿土器包含層調査報告」『京都帝国大学文学部考古学研究報告』6
- ・濱田青陵（耕作）1930 『東亜文明の黎明』刀江書院
- ・蒔田鎗次郎 1896 「弥生式土器（貝塚土器ニ似テ薄手ノモノ）発見ニ付テ」『東京人類学会雑誌』122
- ・蒔田鎗次郎 1897 「弥生式土器」『東京人類学会雑誌』138
- ・蒔田鎗次郎 1898 「弥生式堅穴より石器の発見」『東京人類学会雑誌』150
- ・蒔田鎗次郎 1902a 「関東平野に於ける石器時代の朱」『東京人類学会雑誌』191
 - * 「…朱の簡易なる鑑別法を申して置きます。先づ試験せんとする物体を凡そ五六寸程の小硝子管の中心に置きまして、燈火を以て其部分を熱するのであります。若し水銀朱なれば亜硫酸瓦斯を發して水銀は忽ち熱の為に氣發して兩端の冷部に水銀鏡を造ります。若し之が鉄朱でありましたならば、依然として現形を失はず其儘で居ります。」
- ・蒔田鎗次郎 1902b 「弥生式土器と共に貝を発見せし事に就て」『東京人類学会雑誌』192
- ・蒔田鎗次郎 1902c 「大野雲外氏の埴瓮説に就て」『東京人類学会雑誌』196
- ・蒔田鎗次郎 1904 「埴瓮と弥生式土器の區別」『東京人類学会雑誌』215
- ・Munro, N.G. 1911 *PREHISTORIC JAPAN*.（横浜）
- ・宮川和也 2007 「蒔田鎗次郎の足跡―北豊島郡上駒込十三番地―からの出発―」『東京考古』25
- ・望月澄男 2011 『弥生土器、海軍砲、新技術で近代史を彩った有坂鋁蔵』三樹書房
- ・八木奘三郎 1898 「馬來形式の新遺物発見」『東京人類学会雑誌』145
- ・八木奘三郎 1900 「九州地方遺跡調査報告」『東京人類学会雑誌』173・175
- ・八木奘三郎 1906-07 「中間土器（弥生式土器）の貝塚調査報告」『東京人類学会雑誌』248・250・252・256
- ・山内清男 1932-33 「日本遠古之文化」『ドルメン』1-4~9・2-2（山内 1939『日本遠古之文化』補註付・新版）



景 ▲ 望ヲ園公野上リヨ塚貝岡ケ向
坪井報告にみえる向ケ岡貝塚



◎当時の地形に落とした各地点
1883年測量五千分の一地形図は、弥生町の壺発見当時、
一帯がどのような状況であったかをよく教えてくれる。

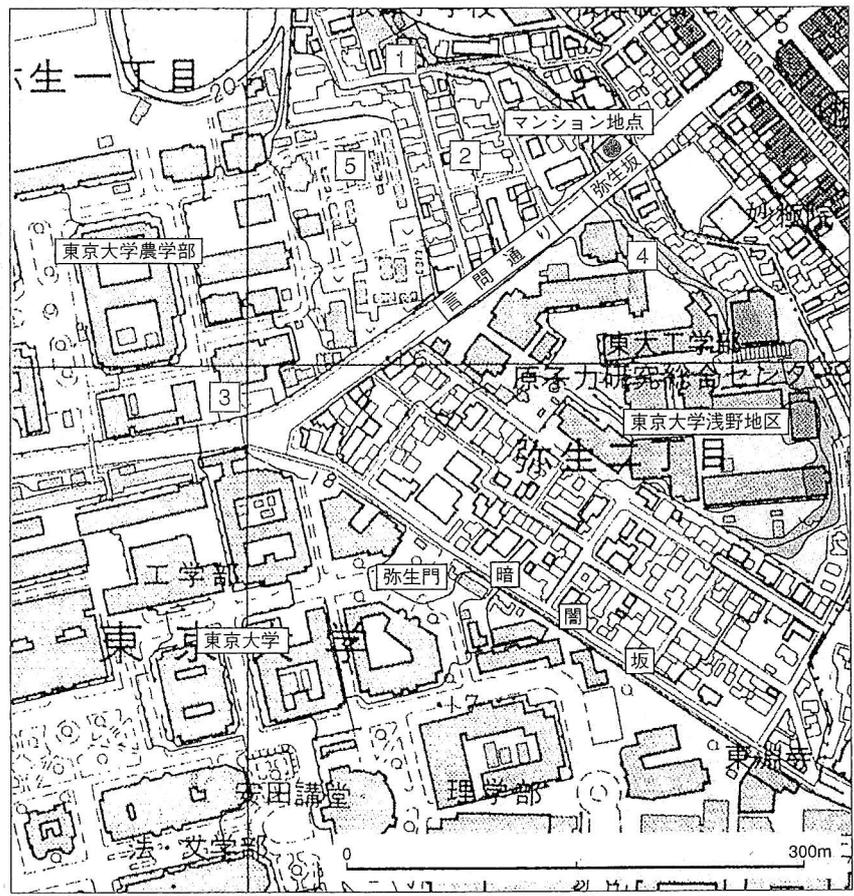


(鮫島 1996)

1884年に発見された壺形土器



◎有坂紹蔵
考古学への関心を深め向ヶ岡貝塚で壺を発見したが、造兵学の専門家となり、55歳になってから弥生町の回顧談を語りはじめた。



◎「弥生式土器第1号」出土地とされる5つの地点
1：坪井正五郎・中山平次郎・太田博太郎・今村啓爾地点、2：江坂輝弥・杉原荘介地点、3：斎藤忠地点、4：佐藤達夫地点、5：原祐一地点

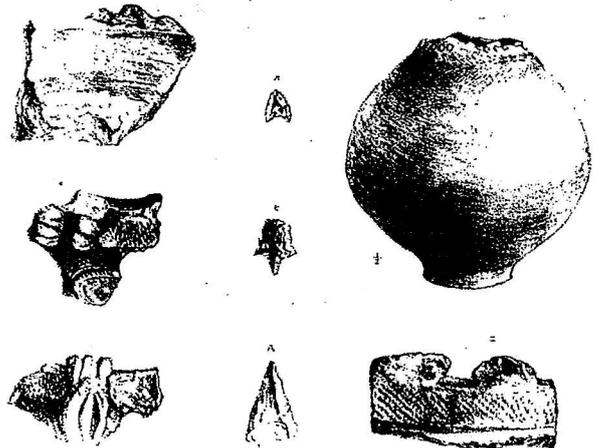
1884年本郷区向ヶ岡弥生町貝塚で一個の壺が見つかる

帝國大學の隣地に貝塚の跡有り

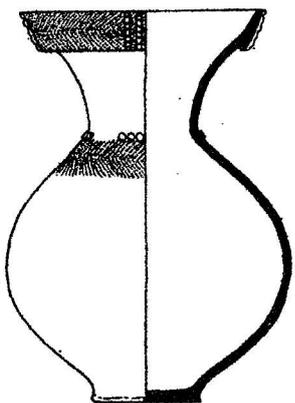
大學院 坪井正五郎

上野の公園に博物館と大佛堂が有るのを見て或外人が Old and new stand in contrast と申しましたが夫よりも對比の甚しいのは帝國大學の隣地に貝塚の跡の有る事でございます。帝國大學は法醫工文理各學科の學者が集合して國家の須要に應ずる學術技藝を教授し及び其結果を研究する所、貝塚は石器時代の農民が部落して饑へば食ひ飽けを饑ね疎々として日を送りたる所、斯く迄に性質の異つたものが接近して存するは奇妙ではござりませんか、我々日本人に先立つて此日本島に住居した人民の遺跡が今尚ほ大學の隣地に存して居るとは實に意外な事ではござりませんか、併し此古跡の有る地は格別六、敷所では無く、僅に一筋の往來を隔てたる大學の北隣、即ち舊向ヶ岡射的場の西の原、根津に臨んだ崖際でございます、又此所に在る古物も深く土中に埋もれて見出し悪いと云ふ様を譯では無く多く地上に散在して居るのでござりませぬ、夫故に多くの讀者諸君中には此古跡の發見を奇妙意外と思はるゝ方が有るかも知れませんが私は反つて此古跡に注意する人の少かつたを奇妙意外と考へます、私の友人と私が今日迄に此所にて拾ひ取り又は掘り獲た物は

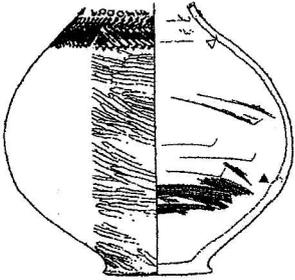
と同様を石器時代の遺跡が澤山ござります、石器時代の遺跡が澤山有る中で私が殊に向ヶ岡貝塚を撰んで記したのは帝國大學に接近した地に在り乍ら大學中の人にすら善く知られないからでございます、又地均らしの爲日々人夫が往來するので踏みじられる事甚しく將に其跡を失はんとして居るからでございます、思ふふ此文が東洋學藝雜誌に載つて讀者諸君の目に觸れる頃に、此貝塚は殆ど知れない様に成つて仕舞ふでござりませう、實は記すのも手後れでござりました、否手後れならば猶更記す必要がござります、



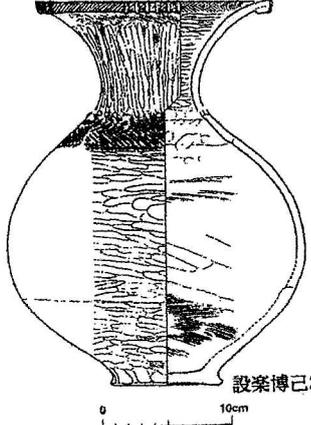
坪井正五郎による彌生町向ヶ岡貝塚の報文



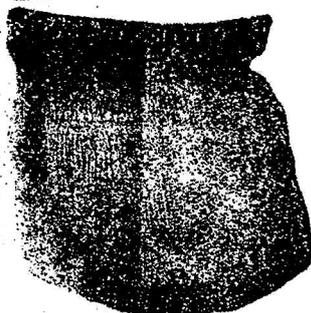
小林行雄1938(復元図)



鮫島和大1996



設楽博己2000



〔月七年六十拾例〕片器土見製板新野上 圖二第

次に向ヶ岡貝塚に就いて話させよう。向ヶ岡と云ふ場所は大學の裏門の道を距てた通りの向ひ側で根津の街を眼下に見る丘であるが今日では彌生町の街が建つて遺蹟の正確な位置は解りません。其頃彌生町と云ふ街は無かつた。裏門の筋向ひには陸軍の射的場があつて其の西北の方に貝塚が根津の裏の高い丘の上にあつた。

十七年三月一日に坪井白井兩君と知巳と成つたその翌日、一所につれだつて向ヶ岡の貝塚に行つて見やうではないかと云ふので行つて見たところが其時もあり色々な物を掘り得ました。此日私はふと貝塚の表面に壺の口が貝のなかから出てゐるのを見出し、これをなほ抜き出して見ると、この壺が(第三圖)が出ました。

有坂紹蔵の懐古談 (1923年)「正確な位置は解かりません」と1883年7月に新坂で採集した土器(壺の破片)

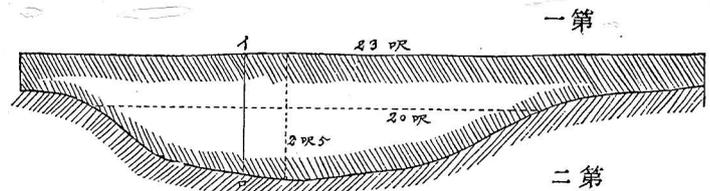
「彌生土器第1号」(設楽2000)の実測図3種



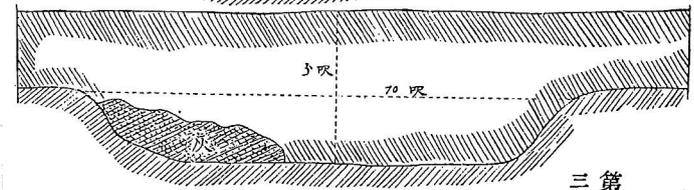
蒔田鎗次郎

1871~1920 (明治4~大正9)

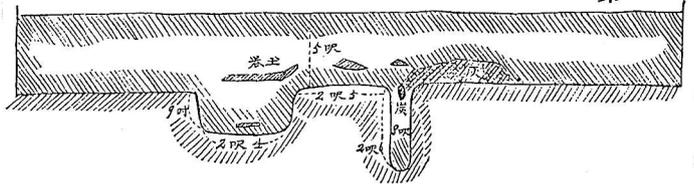
(第一)ハ私邸内ノ遺跡



(第二)ハ田端村道灌山ノ断面ニ見ル所



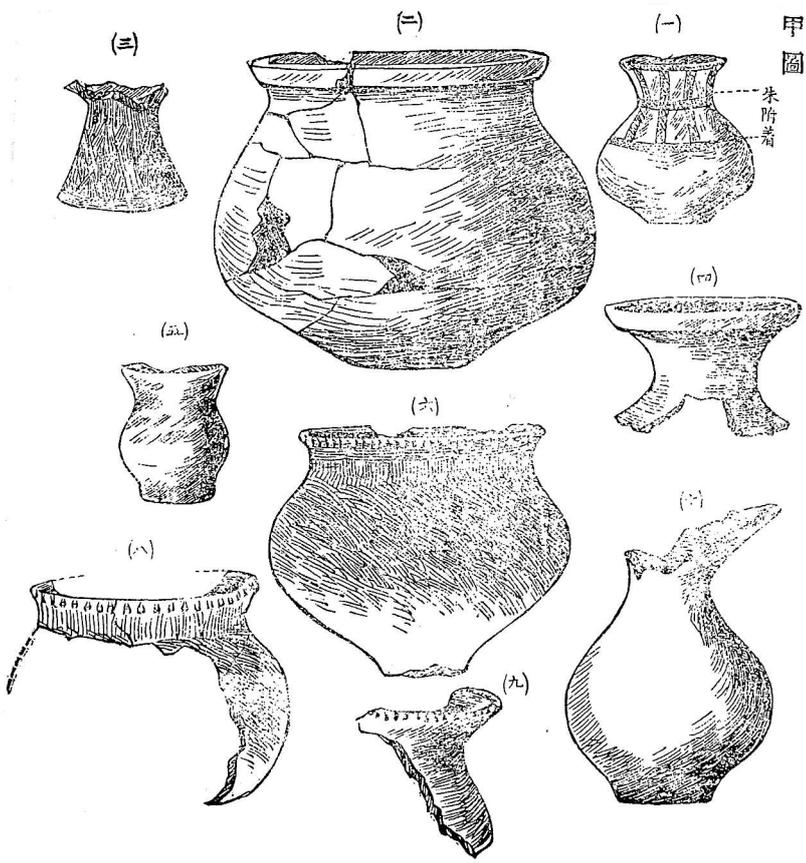
(第三)ハ王子村龜山ノ断面ニアル一部分



○彌生式土器(貝塚土器ニ似テ薄手ノモノ)
發見ニ付テ 蒔田鎗次郎

本年三月十五日テ有リマスガ私邸内(北豊島郡真鴨町上駒込十三番地)ノ塵捨場ノ断面ニ土器ノ腹部露出セルヲ偶然發見シ此レヲ掘リ探リ見マスルニ完全ナル壺形ノ土器デアリマシタガ實ニ斯ル場所ヨリ遺物ノ出デントハ事ノ意外ニ驚マシタ其ヨリ猶ホ注目致シマスルニ點々ト破片ノ土中ニ狭マレ居リマス故ニ是ハ正シク包含層ナラント存テ翌日ヨリ發掘ニ着手致シ圖中番號ノ如ク第一號ヨリ順次發見シ其翌日ハ人類學教室ヨリ佐藤、島居、及大野ノ三氏參ラレ目前ニ第六號瓶形樣ノ土器ヲ掘出シマシ

甲圖



- (一) 高サ 四寸 口徑 二寸七分五厘 底徑 一寸六分五厘
- (二) 高サ 七寸八分五厘 口徑 八寸八分五厘 底徑 三寸二分
- (三) 高サ 三寸一分 口徑 三寸九分五厘
- (四) 高サ 六寸三分 口徑 六寸三分
- (五) 高サ 二寸二分五厘 口徑 二寸二分五厘 底徑 一寸四分五厘
- (六) 高サ 八寸四分 口徑 七寸四分 底徑 二寸四分
- (七) 高サ 八寸三分 底徑 三寸七分
- (八) 高サ 六寸一分五厘 口徑 六寸一分五厘

(略)
右ニ述ベマシタル是等ノ土器ハ貝塚土器トハ一種異ナルモノニシテ初テ彌生式ノ陶ヨリ發見セラレタル故ニ人類學教室諸氏が彌生式ト名ケラレタルモノデアリ其形テノ製作ハ貝塚土器ニ比ブレバ大イニ巧ナレトモ裝飾ニ至リテハ極メテ簡單ナルモノニシテ重ニ鐵朱ヲ以テ全軀ニ塗リ或ハ粗雜ノ模様ヲ畫キ又浮沈紋ト區別スル程ノ多クノ模様ヲ未ダ見受ザレトモ重ニ圓形或ハ條樣ノモノヲ肩、縁ナドヘ附着セシムルコト埴輪物ノ裝飾ト同様デアリマス又沈紋ニ至リテハ現時ノ聯隊旗ノ如キ三角形樣ノモノヲ多ク畫ク様ニ思ハレマス其テ是等ノ器物ハ何ツ時代ノ人種ノ手ニ

○馬來形式の新遺物発見

(略)

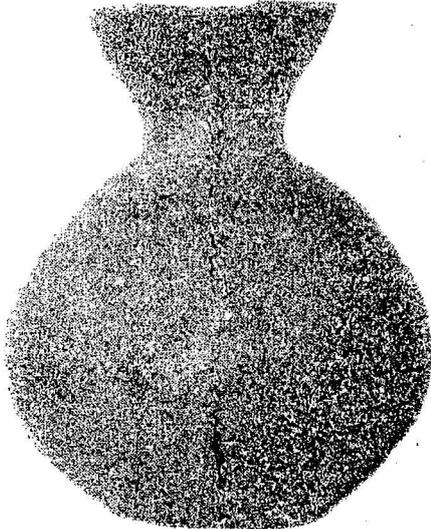
八木 装 三 郎

明治廿七年の春會員、大塚又兵氏は書を友人鳥居龍藏氏に寄せて同地方に一の新遺跡を発見し得たるに由り來探ありたしとの赴を報道せられぬ、因て氏は直に彼地に

張して實地の取調べに従事せられしに出す所の土器は貝塚ものとも付ず、又古墳物とも付かざる一種異りたる風にて、且つ其墳處は從來類例を見ざる堅穴様のものなれば向とも決定し難く其儘歸京するととなれり、當時氏は予等と共に或は古書に所謂惡ぶる神などの品にはあらざるやとて語り合へども別に確乎なる考按淨はずして止みぬ、勿論其以前即ち廿六年頃西ヶ原農事試験所の構内なる貝塚中より一種の土器出でしが右は嘗て坪井氏の本郷向ヶ岡なる彌生町貝塚より採集せし土器の或ものに似たれば彌生式の名を附すること適當ならめとて遂に此名稱を用ゆると爲れり、(略)



北豊島郡西ヶ原農事試験所内(高12.5cm)



鳥居龍藏 1925 『武蔵野及其有史以前』
(磯辺甲陽堂) に見える
「北豊島郡西ヶ原農事試験所内」の土器

八木装三郎 1898 「馬來形式の新遺物発見」
『東京人類學會會雜誌』 145号, pp. 271-278

○埴登土器に就て

大野 雲 外

埴登土器の種類、及び此類の分布、并びに關係事項記載目録は既に第百九十號に掲げて置きましたが、是より漸次思ふ所を記します。(或る點は重複しますが必要上再記します。)

一 此類の土器の學術界に紹介されたのは坪井理科大学教授が明治二十二年四月東洋學藝雜誌第九十一號に「帝國大學隣地に貝塚の跟跡あり」と題する文中に記されたのが初まりて有ります。(第百九十號卷末圖1) 其後二十六年頃西ヶ原農事試験所構内なる貝塚より発見せられし三箇の土器は正しく曩に彌生町貝塚より発見の土器と類似のものにて一種異様なれば之を呼ぶ名稱に困却し教室に於て評議の結果町名を採つて彌生式土器の假名を下したる次第で有ります。(略)

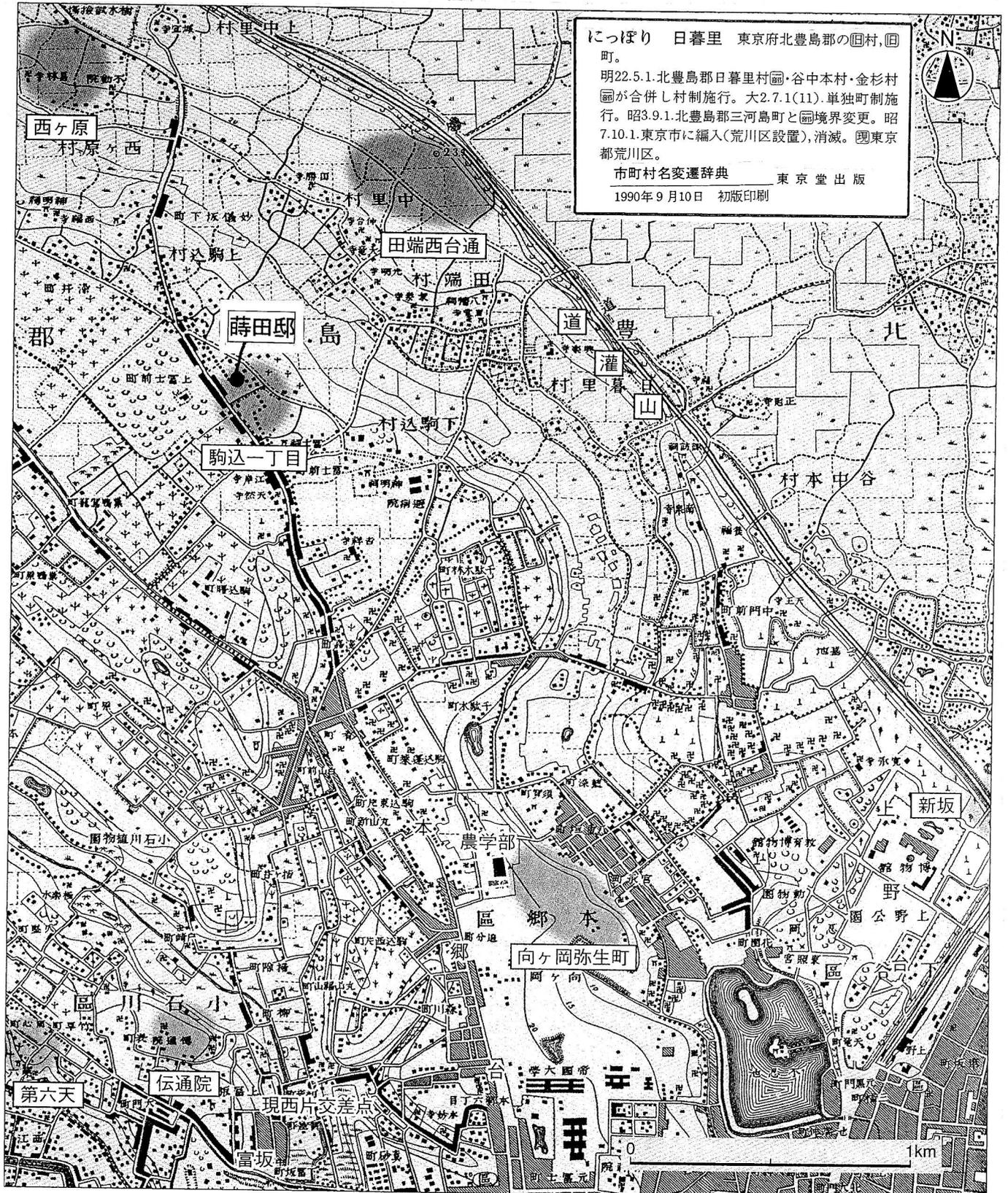
大野雲外 1902 「埴登土器について」
『東京人類學會會雜誌』 192号, pp. 239-244



「西ヶ原農事試験場構内」発見の土器と墨書

三個之内
武蔵野北豊島郡
西ヶ原村農事試験
場構内之出

「彌生式土器」命名の契機となった土器



につぼり 日暮里 東京府北豊島郡の旧村、旧町。
 明22.5.1.北豊島郡日暮里村(谷中本村・金杉村)が合併し村制施行。大2.7.1(11).単独町制施行。昭3.9.1.北豊島郡三河島町と()境界変更。昭7.10.1.東京市に編入(荒川区設置),消滅。()東京都荒川区。
 市町村名変遷辞典 東京堂出版
 1990年9月10日 初版印刷

● 蒔田が発掘した場所

蒔田は、新坂を除く少なくとも6遺跡の類例を比較検討できた。とくに蒔田邸の現・駒込一丁目遺跡と田端村道灌山は自ら発掘して出土状態まで観察したうえで弥生式土器の研究を進めた。なお、現在の道灌山遺跡は当時日暮里村なので、蒔田の田端村道灌山は現・田端西台通遺跡にあたる。

下谷区		
2222	明13測量	明20. 8. 26
2223	明24修正	明24. 6. 27
2224	明30一修	明30. 3. 30
2225	明30一修	明20. 8. 26
5	明13測図	

蒔田が扱った主な弥生式土器出土遺跡

○彌生式土器と共に具を發見せし事に就て 蒔田 鎗次郎

府下豊島郡田端の道灌山に穴のあること及び其より彌生式土器を出すことは既に第百三十八號の本誌に掲げて置たが此は海岸線工事の時に掘取られた斷面に露はれたのでかゝる場合が無ければ此の調査は實に困難であるのだ此の發見は今より丁度五ヶ年程以前の事て此の間には随分所々から土器の發見等も有つたが穴の研究は一向に進まないのはつまり調査が出来悪くあるの故だ道灌山は豊島線工事初められたので今や再び調査するの機會を得たのは實に喜ばしき事であるしかも表題の如き事實の發見されて予は坪井先生の命を受け日本鐵道會社に之に向て便宜を與へられたので充分満足なる調査を遂げたのである

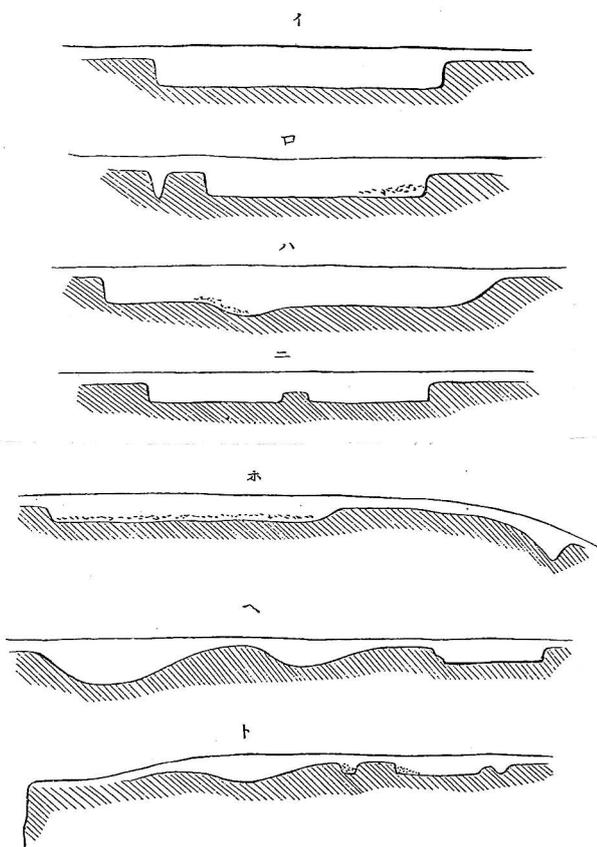
場所は田端停車場を去る北へ僅かに二三町、以前に掘去られた處より續いて西南へ向て道灌山を横に最早二分の一程掘られたのである其の切り口には例の堅穴的の穴が大小幾つとなく發見された此の穴の内には長いのがあり短かいのがあり深いのがあり浅いのがあり角のもあれば又圓のもあるなど様々な形に依て露れて居る丁度此の報告をする迄に兩側に都合二十四個程有つたが絶へず掘られてあるのだから殖へもすれば又減る事もある

(略)

先づ今迄に發見された穴の種類はこんな物で此等の穴がこの丘上丈けても幾十百あるか其は實に驚くばかり存在するに違ひない此の穴を以て或る儀式の爲に造られ土器を埋た如く考へらるゝ諸氏が多い様であるが故意に埋た如く思はれる一二の穴も有るが多くは自然に埋た事は地層に由て明に分てをる

(略)

道灌山發見 彌生式土器

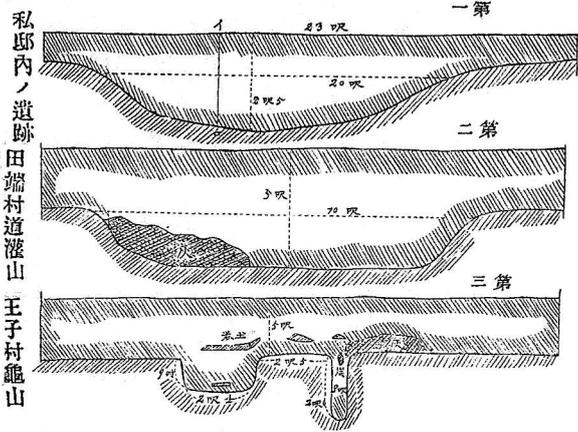


其て此の澤山に發見される穴が此の貝に關係あるとせば如何に考へられるか勿論總括して言ふことは出来まい其は土器を造つた場所もあらうし墳墓として埋た場所もあらう又住んだ場所も有るに相違ない随分大なる穴も有れば前圖の如く甲より乙へ續いた穴もある今假りに之を住居と見做して貝を食したとすれば石器時代の關係に於て最も貝の調査が必要である臺下には今に諸氏の不審とせらるゝ中里の貝塚がある予は彌生式が若し此の貝塚に連絡が有りはしまいかとは既に以前からの考へて中里貝塚が石器時代のものであるなれば貝の量に比して遺物の少き事だ其も永住したとすれば差支へなからうが一向に土器の破片の無いのが又不審の一である

(略)

「道灌山」の發掘が本格化:

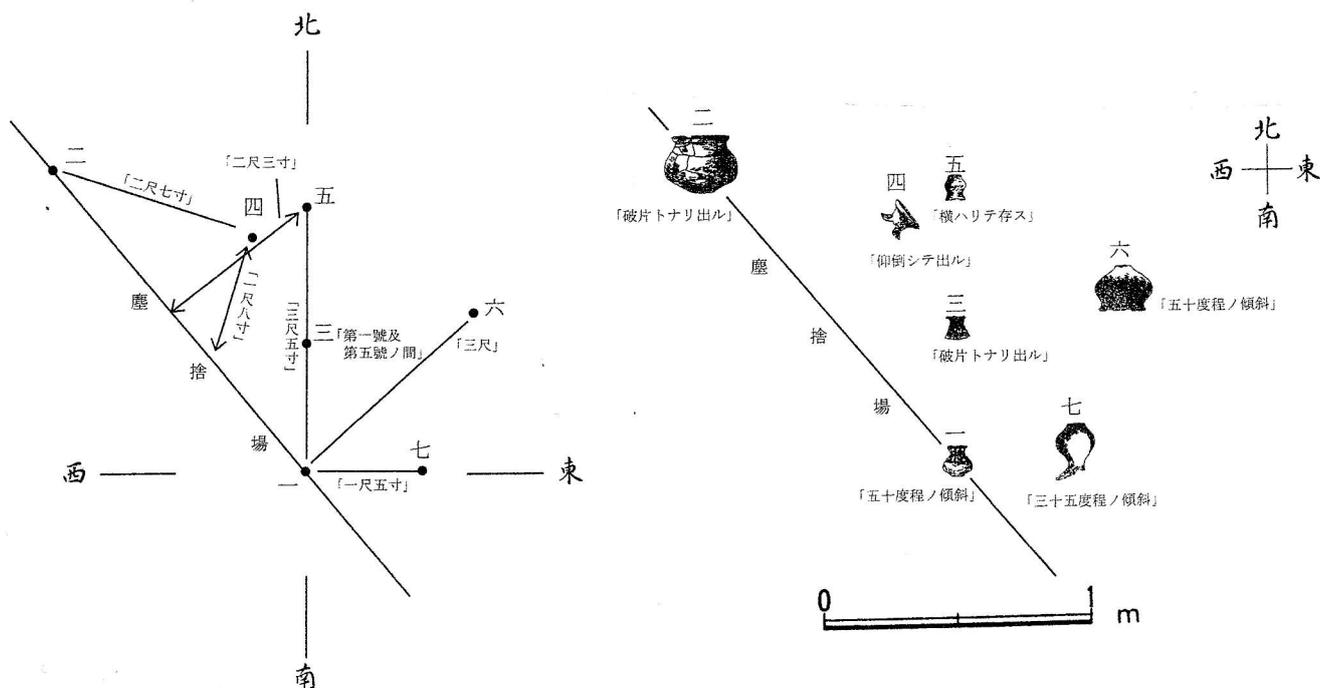
蒔田鎗次郎 1902「彌生式土器と共に貝を發見せし事」 『東京人類学会雑誌』192



乙圖

其ノ私ノ邸内ニ於テ發見ノ器物、位置及燃料トシテ用ヒタルガ如キ木炭片ノ出ルニ依テ考ヘマスルニ殆ンド石世期ノ住居ノ如ク地下ヘ少シク掘リ込ミ之レニ建物ヲナシテ住ヒタルモノカ左ニ(乙圖)二三ノ例ヲ舉グマス
 (第一)ハ私邸内ノ遺跡ニテ北方ハ急ニ南ヘ向ヒ斜面ニ造ラレテ居リマス、(第二)ハ田端村道灌山ノ断面ニ見ル所ノモノデ兩方共ニ急ニ掘込マレ居リマスガ第一圖ヲ(イ、ロ)ヨリ切斷セバ此ノ形狀ヲ得ルモノト考ヘラレマス
 穴ノ大サハ不定デアリマスガ是レハ人数ノ多少ニ由ルモノカ又現在ノ掘リ方ニ依ルモノカ未ダ實見淺キ故比例ヲ取ルコトガ出来マヒソ其テ何レモ一部落ヲナシテ棲息セルモノト思シク必ズ近傍ニ二三ノ穴ヲ發見致シマス
 彌生式土器使用者ハ石器或ハ鐵器ヲ使用シタルモノニ相違ナカルベキモ包含層ヨリ是等ノ痕跡ヲモ發見シ能ハザルハ最モ遺憾トスル所デス又祝部以前ニ用ヒタルモノナリト云ヒ祝部時代トモ云フ説アレハ未ダ右層中ヨリハ祝部及朝鮮土器ノ破片ヲモ得ザル所ヲ見マスレバ或ハ祝部以前ノモノカモ知レマヒソ然レモ是レハ暫ク疑問ニ附シマス

根拠を示して竪穴を住居とし、石器／鉄器どちらが伴うかまだ根拠を得てない (蒔田 1896)



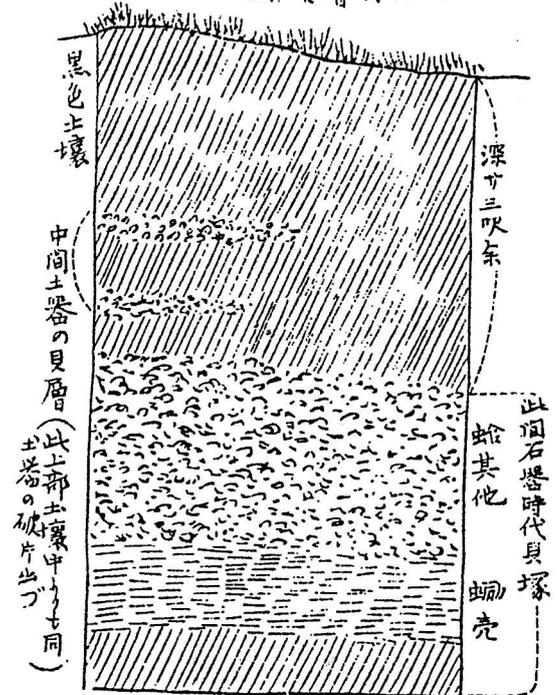
蒔田 1896 の記録から土器群の出土位置が復元できる (宮川 2007 / スケール加筆)

弥生式土器	石器時代土器	石器時代	彌生式	古墳時代
		瓶形土器(平底)	有	
		同 (九底)	有	
		同 臺付(甲種)	有	
		杯形臺付(乙種)	有	
		皿 (平底)	有	
		同 (九底)	有	

斯様に三者の間には平底九底の區別なく發見されるけれど石器時代及彌生式には古墳より多くの平底の有ることは事實にて九底は極く少ない然し古墳には丁度反對に九底のものが大部分をしめてをる。
 故に底の形式から云へば無論彌生式は古墳より石器時代の方に多く關係のある譯だが其一部なる高坏形の底部は何ふかと云ふに之は古墳時代にも關係あれば又石器時代にも關係がある故に彌生式は丁度兩方を連絡する中間物と云ふて宜しい之は形式のみでなく模様の點に於ても三角模機等は古墳に類し席紋の如きは石器時代に類する。
 又彌生式の内に漏斗の如く底部に孔の有るものがある石器時代には此の類品があれど未だ古墳には見ない様に思ふ斯様に三者の關係を實際に於て認められるが石器時代土器と彌生式古墳土器などとは懸隔があつて連絡は付かぬ様に思へるが偶然の一致か見習つたかは措置て二三の例を擧げて見れば

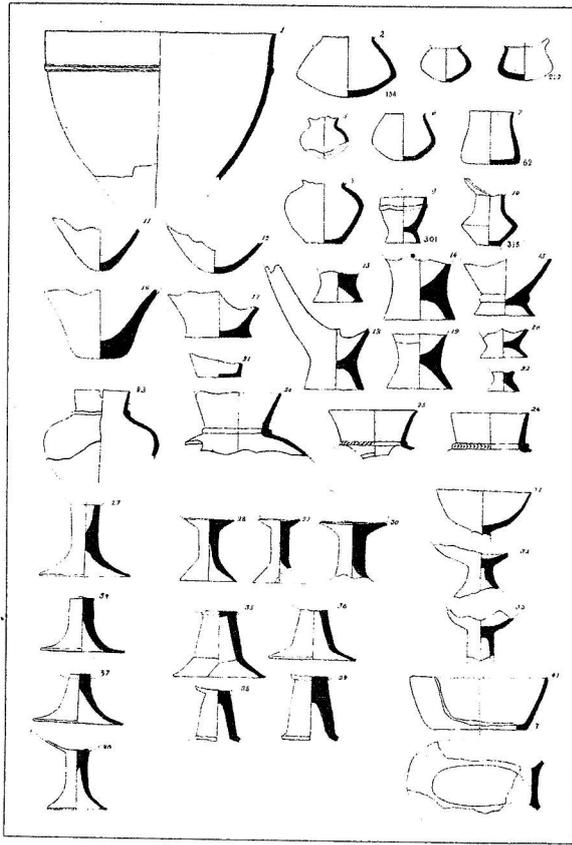
弥生式土器を石器時代 (縄文)・古墳時代土器と比較して中間と判断 (蒔田 1904)

竹林貝層略圖

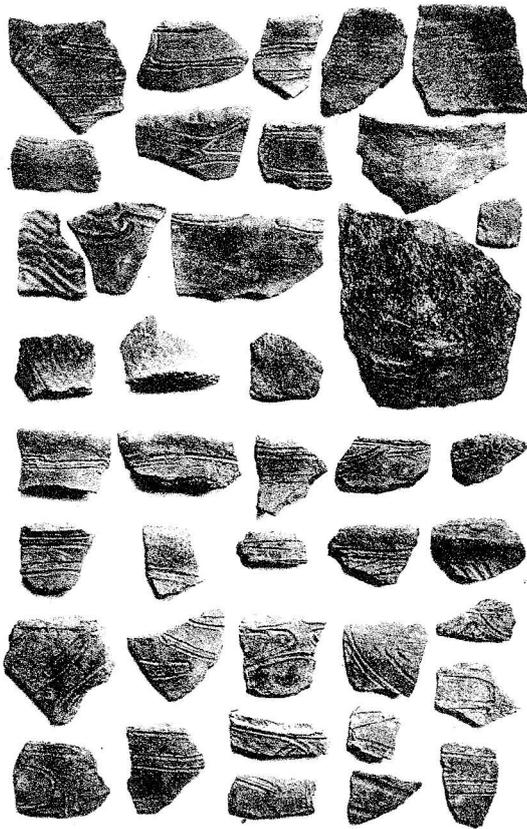


南加瀬貝塚で縄文・弥生土器層位別出土 (八木 1906-07)

第三圖 指宿發見上層彌生式土器圖(ま)



(図の右上邊に附する番號は圖面のと一致し、下邊の番號は製圖時に出たものによる)



指宿下見發點地A 指宿

地 表

黑褐色	灰	山	火	0尺
黑色	盤	流	泥	-1
黑褐色	火山灰	祝部土器 (少量)	彌生式土器 (多量)	-2
同		火山灰		-3
上		火山灰		-4
		(少量) 器土式線曲		-5
稍黄色		火山灰		-6
		火山灰		-7
		火山灰		-8
		火山灰		-9
		火山灰		-10
		火山灰		-11
		火山灰		-12
		火山灰		-13
		火山灰		-14
		火山灰		-15

底 川

B 地點層序並遺物包含圖式

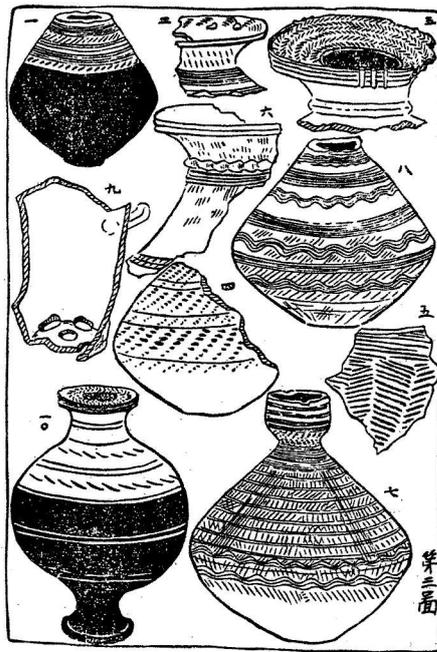
E 地點	D 地點	A 地點	B 地點	C 地點	0尺
					3
石斧 (彌生式)	貝殼 (貝殼)		祝部石 (彌生式)		6
				曲線式	9
		曲線式	曲線式		12
右岸	左岸	左岸	右岸	右岸	15

鹿児島県指宿遺跡で火山灰層を挟んで縄文・弥生土器が出土 (濱田 1921)

鍵谷 徳三 郎

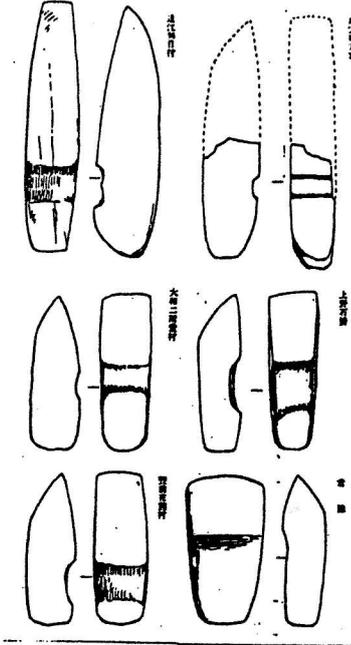
石器類

- 磨製石斧 完全五個 破片拾貳個
- 石鏟 完全壹個
- 石槌? 完全四個
- 凹石 完全六個
- 圓板石? 壹個 缺損壹個
- 石鏃 貳個 缺損貳個

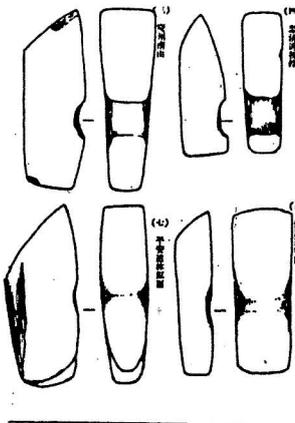


弥生式土器に石器が伴う(鍵谷 1908)

第二十圖 内地、發見抉入石斧集成圖



第二十一圖 朝鮮各地發見抉入石斧集成圖



弥生式に伴う「抉入石斧」が朝鮮半島にも(梅原末治 1922)

私は大和の有史以前の遺跡はアイヌの其れでなく、殆ど全く吾人祖先固有日本人(Japanese progeny title)の残したものであるとすてに發表いたしました。が、その他の地方のものは如何と云ふに、是等もまた大和と同じく殆んど固有日本人祖先の有史以前の遺跡であつて、遺物の如きも大和の其れと大差は無し。(中略)

石庖丁も中々多い、之に比して石斧は極めて少ない、石庖丁は固有日本人石器時代遺跡に伴ふもので、這是單に畿内にとゞまらず他でも左様であります。加之、此處の石庖丁の形式は朝鮮、滿洲の物とよく似て居る、殊に朝鮮、滿洲の石器時代遺跡には石庖丁其作り掛の物、其破片は豊富である。

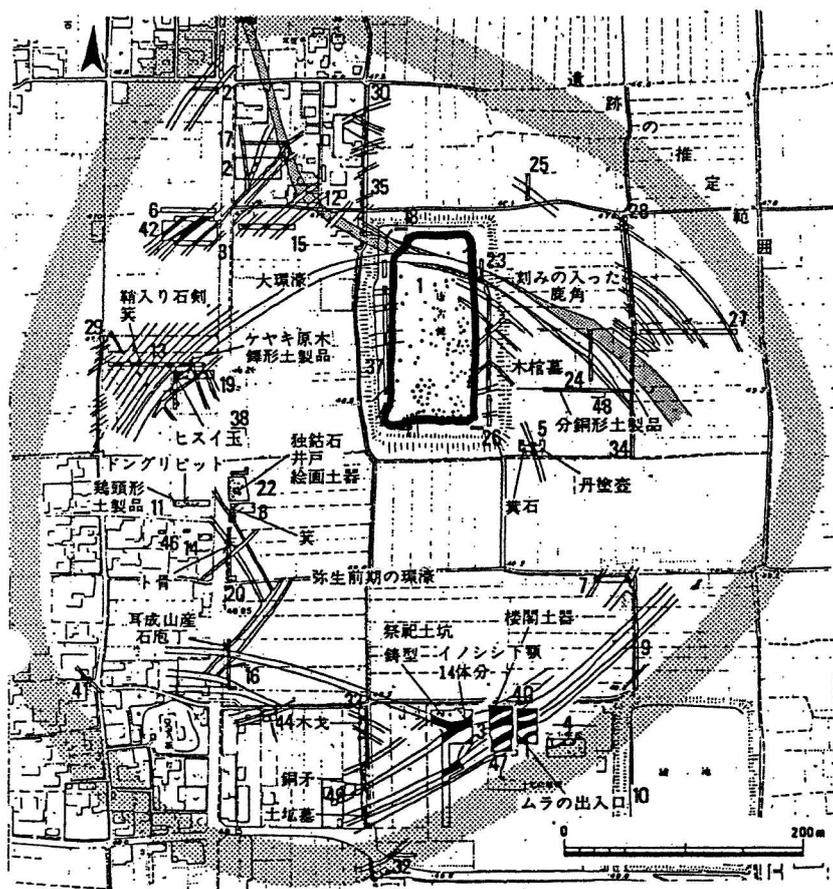
石斧は小數ながらも磨製が主で、之れに蛤刃と片刃との二種類がある、尙ほ一種特有な彎曲片刃の石斧がある、這是大和河内にもあれば、近江からも石劔(京都大學所藏)と共に居る、斯くの如き形式の石斧は朝鮮の石器時代に特有のもので、南部に於ては慶州附近が最も多い、是等は何等か互に關係がある様に思はれます。(中略) 所謂彌生式土器の名稱ある固有日本人の物で、畿内地方は殆んどこの種のものである、而して土器の形式はすべて共通を有し、當時互に交通往來して居つた事が知れます。(中略)

是等の土器は朝鮮や滿洲、沿海州、東蒙古の石器時代の土器とよく類似して居つて、其形狀、紋様、把手などは殆んど全く同じであります。是等の類似と云ふものは決して偶然の一致とは思はれない、この間には面白い人類學上の謎が含まれて居ると思ひます。私は此の謎は畿内の固有日本人の遺跡遺物は東北方亞細亞大陸と深い關係が存在して居る事と考えます、這是單に土器の類似のみならず、石器の其れに於ても又同一の事實を示して居ります、私は日本の周圍の大陸や嶋嶼の石器時代遺物に注意し調査して居りますが、未だこの東北方亞細亞大陸の物ほどよく似たのを他で知る事は出来ません。而して斯くの如き固有日本人の遺跡はたゞに畿内ばかりで無く中國にも九州にも關東にも廣く存在して居りますから、是等の遺跡は先史考古學や人類學上から申せば、日本本島から壹岐、對馬、朝鮮の多島海の諸島嶼を經過し大陸に連絡して居ると申してよろしい、私は彼等はもと大陸から移住して來たものであらうと考て居ります。(中略) 固有日本人は最も古い時、石器時代の時から畿内に住まつて居つた、其母の國は亞細大陸、朝鮮半島であつたであらう、の理由で私は古い古い昔は日本本島も朝鮮半島も人類學的に續いて居つたものと思ふ。彼の神話時代になつて、朝鮮半島との交通往來は有史以前石器時代からの引續きであります、されば畿内(中國、九州其他も)の石器時代の研究はどうしても朝鮮の石器時代の其れと比較せねばなりません、尙ほ併せて滿洲沿海州東蒙古のものとも。

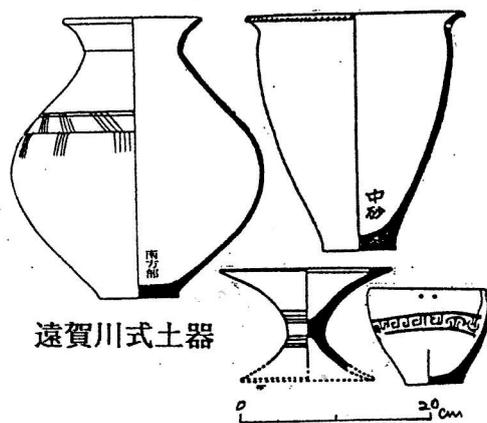
日本と朝鮮(尙ほ滿洲人、ツングース、蒙古人等)との關係は人類學、言語學上等より見てもよく類似して居ります、この事に就てはすでに内外先賢の認むる所でありますが、之に加ふるに更に考古學上の證明が出来ますから、一層この意見は堅固のものとなつて参りました。之れまで日鮮の關係は神話時代から説かれましたが、私は神話時代よりもつと前の石器時代から始まつて居ると考えたい、しかもこの關係は單に交通往來貿易等の其れでなく、寧ろ人類學的の關係を有して居ります。

鳥居龍藏の「固有日本人」説：鳥居龍藏 1917「畿内の石器時代に就て」『人類学雑誌』 32-9

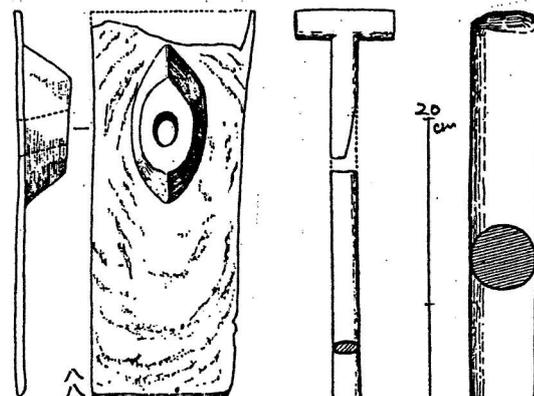
石器の特徴から弥生式土器使用者=渡来人説が主張される



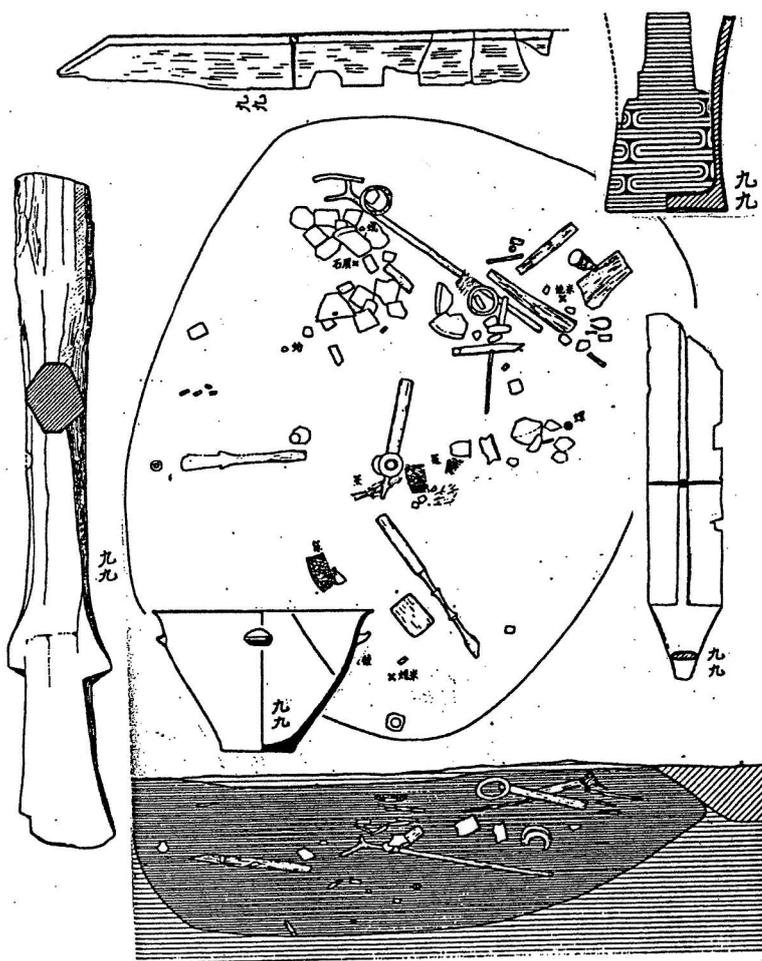
唐古遺跡の全容：唐古池 1937年調査地



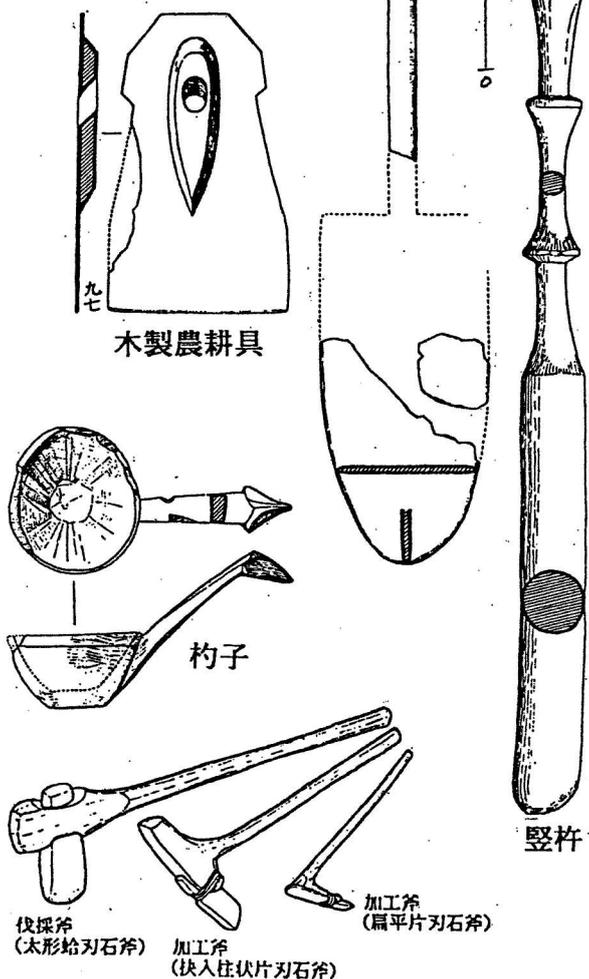
遠賀川式土器



木製農耕具



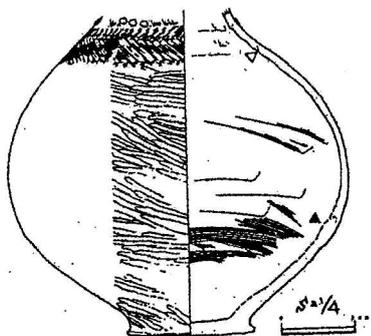
第99号竖穴



杓子

竖杵

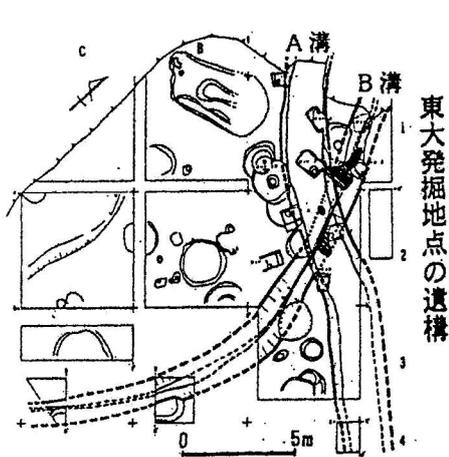
奈良県唐古遺跡の1937年調査で弥生時代前期から稲作が証明される (末永ほか1943)



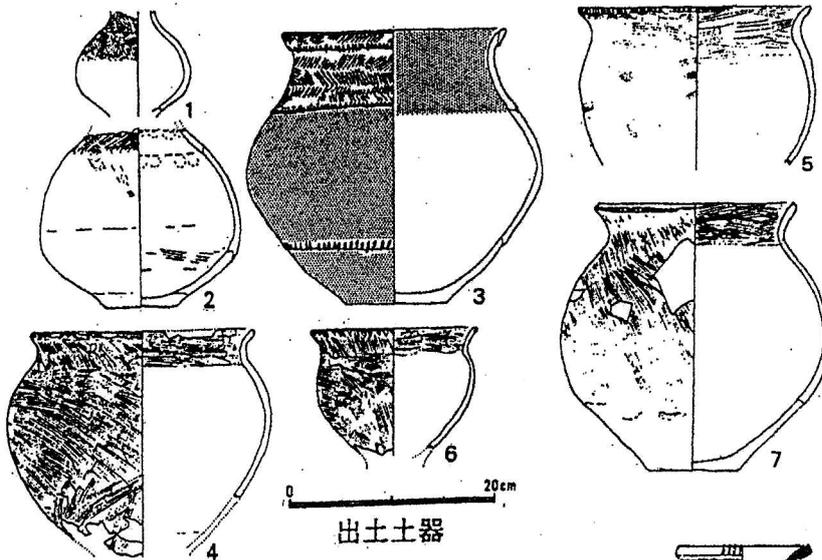
1884年に発見された壺形土器



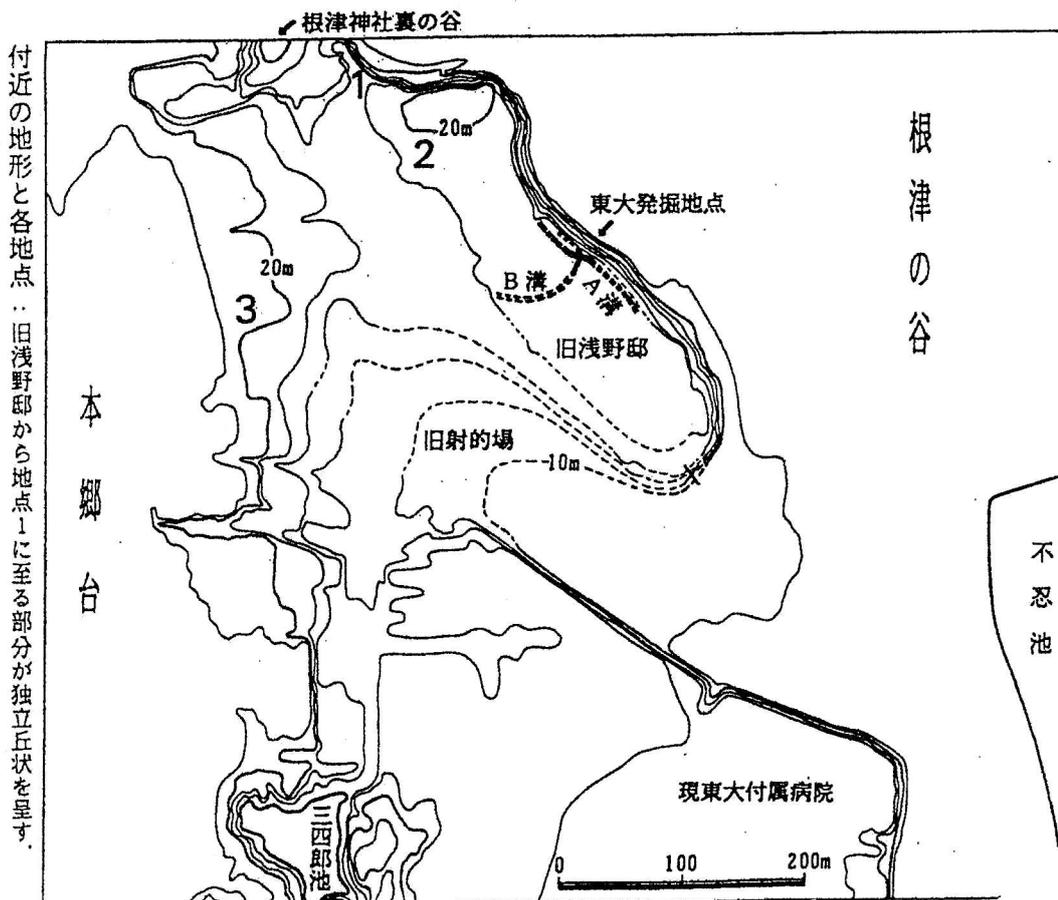
景▲望ヲ園公野上リ■塚貝岡ヶ向
坪井報告にみえる向ヶ岡貝塚



(東大考古学研究室 1979)

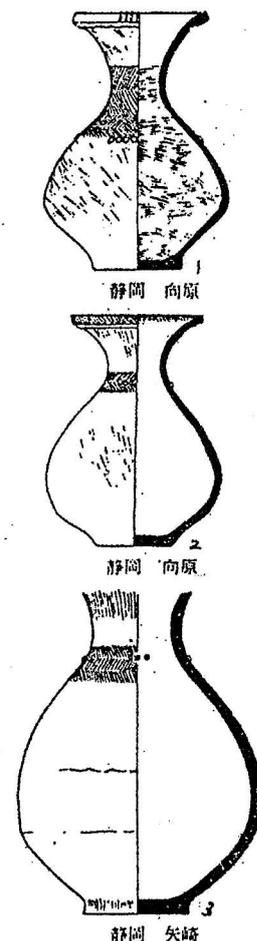


出土土器

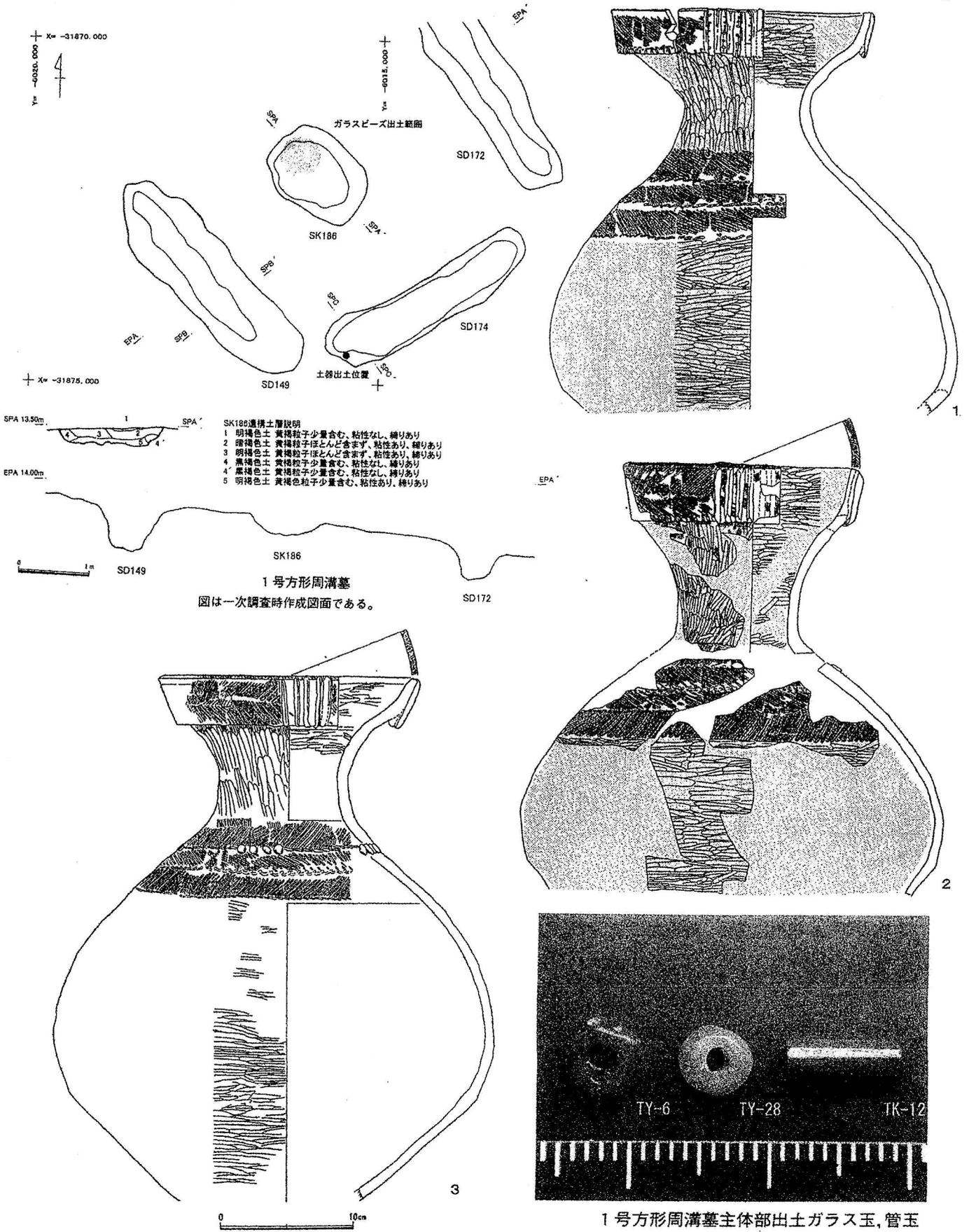


(石川 2008)

弥生町遺跡

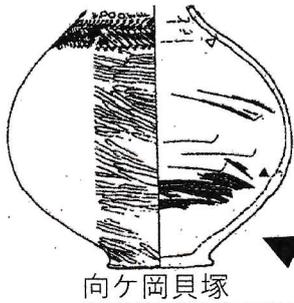


静岡県東部の関係資料

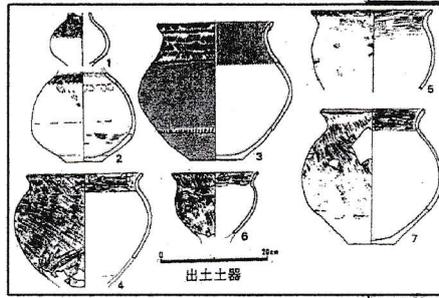


弥生町・武田先端知ビル地点の方形周溝墓と出土遺物

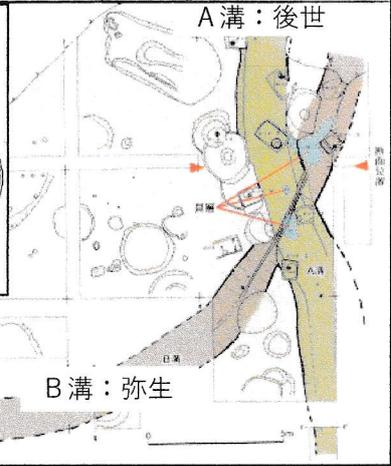
(原祐一 2002 『東京大学本郷構内の遺跡 工学部武田先端知ビル地点第2次調査速報』)



向ヶ岡貝塚

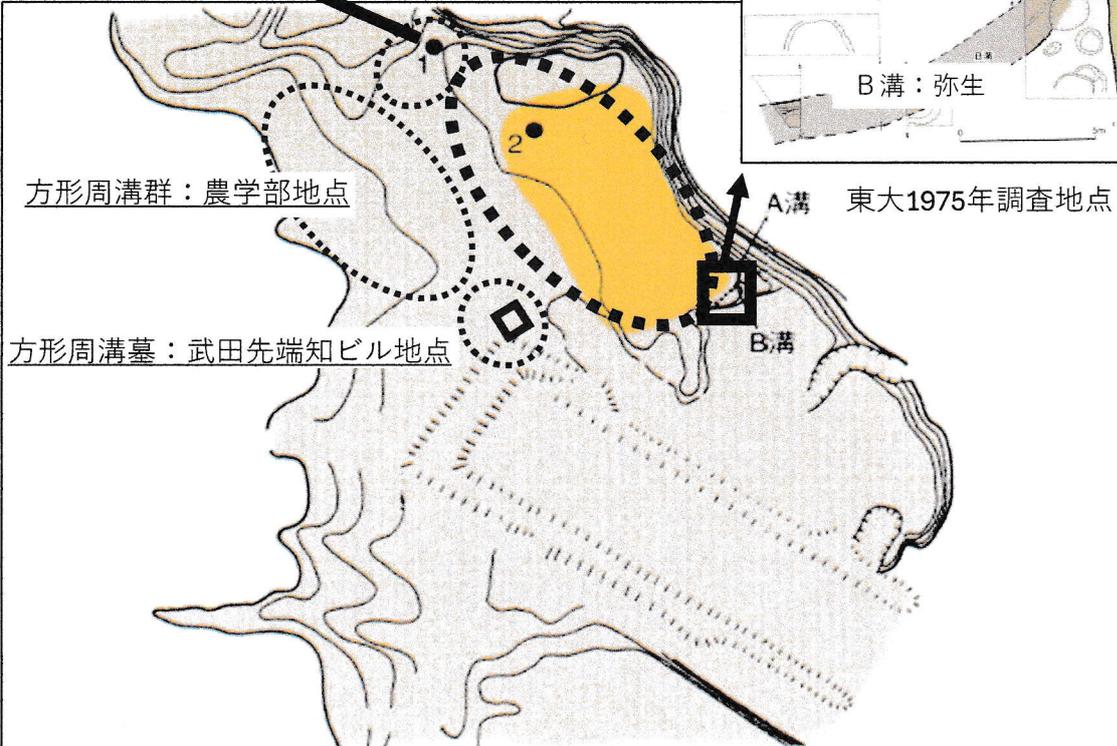


出土土器



A溝：後世

B溝：弥生



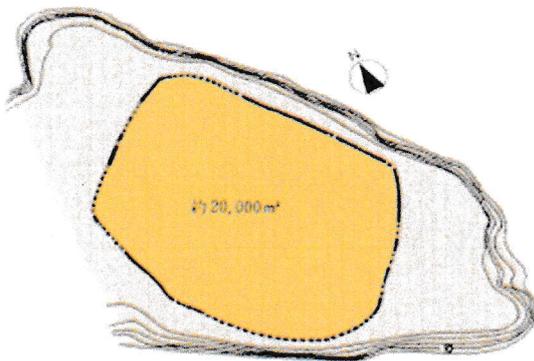
方形周溝群：農学部地点

方形周溝墓：武田先端知ビル地点

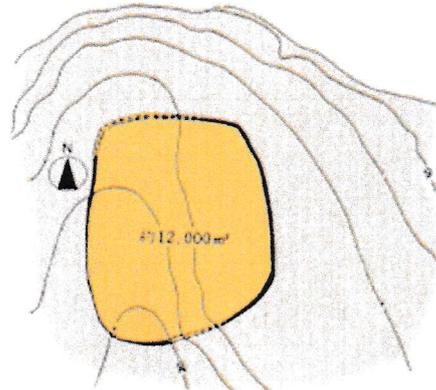
A溝 東大1975年調査地点

B溝

1.検出された弥生町の環濠と周辺地形



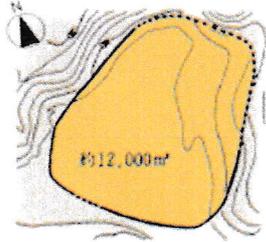
2.東京・赤羽台



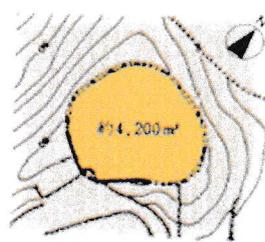
3.東京・下戸塚



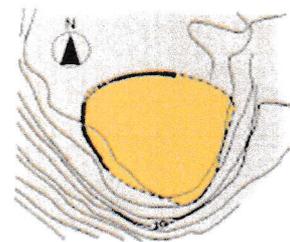
4.神奈川・神崎



5.神奈川・大原



6.神奈川・殿屋敷



7.東京・下山

0 200m

弥生町遺跡は弥生後期の環濠集落： 南関東の主な弥生後期環濠集落との規模比較